

## リレー随筆

# 旅する「文學展」に寄せて――森山朋絵

「文學の触覚」展は、旅する展覧会である。かつて東京都写真美術館において開催され、講談社の文芸誌『群像』と連携し、純文学作家らの参加を得て多方面に話題を呼び、3年の月日を経て「感じる文學」（動く・触る・薰る）（佐世保市博物館・島瀬美術センター）として長崎に甦った幸運な企画展でもある。旅は続き、『土佐日記』で名高い高知に「文学 Media Art」展として辿り着いた。

この展示は「子どももする「メディアアート」なるもの」を対象にしているが、2002年から本当に義務教育になったこの分野は、体験型も多く面白いのに、領域の名前は一般になじみが少ないかもしれない。メディアアートとは、主に複製芸術時代以降のメディア（＝コンピュータやエレクトロニクス機器、情報技術）を用いたり、古くからの技法やテクノロジーを「思いもかけない使い方」で用いて表現したり発信したりする芸術領域のことだ。新しい領域だと思われるがちだが、それを支える「映像／イメージ／影絵や写し絵の源流」に遡れば、実は文学と同じくらい古くから私たちとともににある。

かつて美術館でこの領域をめぐる課題に苦しんでいたとき、この企画の骨格を生んだ監修者の安斎昌幸氏が、「純文学の作者はいま、メディアアート

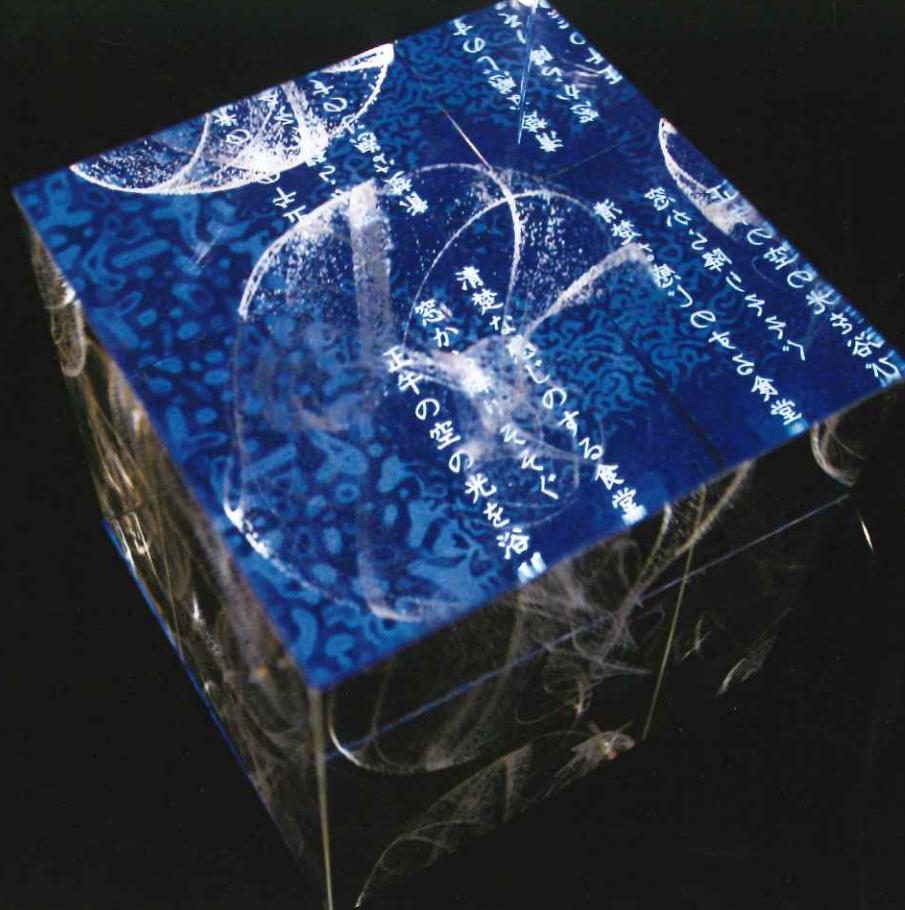
▲木本圭子 + 木原民雄「dimension rendez-vous: literature」2011(作家蔵)

ティストと同じようなことを考えているんです」と、この共感覚的コラボレーションの端緒を作ってくれたのを思い出す。企画準備のプロセスは、三島由紀夫、内田百閒、獅子文六、小林秀雄、谷崎潤一郎、川端康成といった文豪たちを取り上げるのに加え、川上弘美／松浦寿輝／穂村弘／平野啓一郎／舞城王太郎という卓越した文学学者とメディアアーティストが出会って新作を構想し、メールを通して議論し、空間／立体作品の成立過程を追体験するという、至上の機会となつた。

そうした作品群は、会期終了後も海外公募展や文化庁から賞を受け、佐世保市では村上龍作品が加わり、旅する「文學展」は行く先々の文学者を巻き込む構造となつた。今回の「文学 Media Art」展では、アプリや電子書籍、二次創作と「萌える文學」が新たな要素として加わり、現地ゆかりの紀貫之や寺田寅彦にちなんだ作品を含め呈示される。

創作において、ひとは絶対的に独りでありつつも、コラボレーションに拠つて立つ芸術ジャンルとして「メディアアート」を生んだ。純文学に対して「萌える文學」とは何かを考えるとき、この展示が契機になれば幸いである。

（東京都現代美術館企画係主任 学芸員）



高知県立  
文学館

高知県立文学館ニュース

藤

並

の

森

Vol. 60

展覽會  
Exhibition  
会紹介



# Media Art 展 紀貫之からライトノベルまで



平成25年  
2月9日(土)

▼  
4月7日(日)  
企画展示室

観覧料500円

・舞城王太郎×こまばードフラザーズ  
安斎昌幸「舞城小説粉吹雪」

この展覧会は、文学とメディアアートという異なる分野のコラボレーションによって、より深く芸術世界を楽しもうという試みです。

文学は、主に文字という媒体を通して作品世界を楽しむものです。一方のメディアアートは、主に複製技術(印刷など)以降の媒体を使って生まれる芸術です。一見、全く異なる芸術分野であるように思えますが、文学とメディアアートの出会いは、思いもかけない魅力ある作品を生み出しました。

まずは手ざわりや映像、音など、感覚を駆使して作品を楽しんでみてください。作品たちは、きっと皆さんにいろいろなことを語りかけてくれるはずです。

※この展示は、平成24年度(第16回)文化庁メディア芸術祭 協賛事業です。

※この展示は、平成19年12月15日～平成20年2月17日にかけて東京都写真美術館にて開催された企画展「文学の触覚」を下敷きとして再構成したオリジナル企画です。

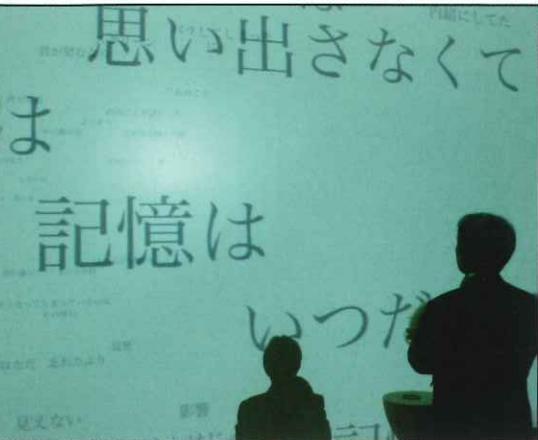
・ライトノベル×安斎昌幸  
未だきちんと分析されていないジャンルである、ライトノベル。このジャンルでは夥しい作品が日々生成されていますが、これまであまり研究の対象となりませんでした。しかし、新しい文学は新しい文体によって生まれるとも言われています。ライトノベルにおける独特のテンポキヤラクターの生成、生き生きした会話文など、これから文学を考える上でヒントになるのではないか。ここでは、本の展示と、その決め台詞を紹介し、ライトノベルというジャンルを味わっていただきます。

・風上旬+安斎昌幸+佐藤薰生  
「萌える文学」「新ごんぎつね」  
新美南吉の名作「ごん狐」を原案にした作品「新ごんぎつね」です。皆さんのがこの作品をご覧になるとき、最初はびっくりされるかもしれません。「萌える文学」は「ごん狐」の舞台を現代に置き換えて、登場人物を皆少女に設定しています。「萌え」という現代的な要素を取り入れ大胆な解釈で作品に新たな息吹を吹き込むとともに、文学作品そのものの魅力も感じることができます。

・平野啓一郎×中西泰人  
「記憶の告白—reflexive reading—」

ボールを手にとって動かす……スクリーンに浮かぶ文字が大きく揺れ動きます。この作品の面白さは「不自由さ」にあります。本を読むとき、ゆつたりした気持で読むのと、先を急いで読むのとでは、文字が迫つてくる速度が違うように感じませんか? この作品も、読むときのもどかしさを感じ取れる、感情と「読書」とがリンクする作品です。「日蝕」で衝撃的なデビューを果した芥川賞作家・平野啓一郎と、

iPadを操作しながら、創り手の痕跡を残さず、決して記録されることなく、粉雪のように消えてしまう、データ時代のテキストの傍観、不安定さを表現したフラッシュユニークーションによるインスタレーション(空間や場所全体を一つの作品として体験させるもの)をお楽しみください。



▲平野啓一郎 × 中西泰人  
「記憶の告白—reflexive reading—」2007(作家蔵)

## 展示構成

### I 文学のゆらぎ

皆さんの中で、「文学」というのはどのようないイメージを持っているのでしょうか。実は「文学」という概念は、人によって、時代によって異なっています。しかし私たちは、あたかも皆が同じ「文学」という基準を持っているかのように錯覚しがちです。

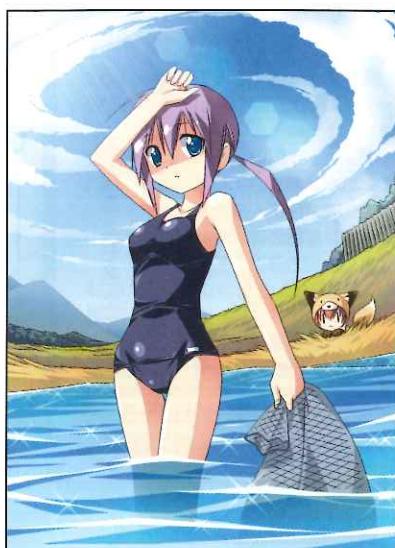
次に紹介する作品は、そんな皆さんの「文学」の概念を揺らがせるものです。これらの作品をきっかけに、今までの文学のイメージを取り払い文学って本当は何だろう? と考えて頂けたらと思います。

・寺田寅彦×木本圭子+木原民雄  
「dimension rendezvous」

文學学者であり、文學者でもあった寺田寅彦。文學と科學の接近を図った寅彦を、時空の概念や複雑系のイメージと、大正末期に詠まれた寅彦たちの連句「RONDO」と合わせて表現します。ガラスの中に白い粒子の模様が刻印されており、上から覗き込むと横からは見えない映像が見えてきます。

### II 文学のてざわり

物理学者であり、文學者でもあった寺田寅彦。文學と科學の接近を図った寅彦を、時空の概念や複雑系のイメージと、大正末期に詠まれた寅彦たちの連句「RONDO」と合わせて表現します。ガラスの中に白い粒子の模様が刻印されており、上から覗き込むと横からは見えない映像が見えてきます。



◆風上旬／安斎昌幸／佐藤薰生  
「萌える文学 新ごんぎつね」2011(作家蔵)

バーチャルリアリティと衝撃衝動を結びつけた  
中西作品「Narrative Hand」の世界が交  
差した、触覚・知覚に訴えるインタフェースデ  
ザイン（人と機械を結びつける「接面」）のデザイ  
ンです。

### III 文学のひびき

読書をしている時、文章のリズム、登場人物の  
声が生き生きと再現される、という体験を皆さん  
もお持ちだと思います。文学の中の響きを、  
感じ取ってみませんか？

#### ・谷崎潤一郎×森野和馬「谷崎リズム」

人は文章の「リズム」を感じ取りながら読書を  
しますが、そうした感覚的なものを視覚化した  
ら、文学の「リズム」はどのように表れてくるの  
でしょうか？この作品は、谷崎潤一郎の「陰翳  
礼賛」を引用し、谷崎の文章を音や動きを示す  
別のメディアに置き換えて、その美しさを検証  
しようと試みた作品です。

#### ・紀貫之×初音ミク+松本祐一「うたう紀貫之」

#### ・紀貫之×小野大輔「よむ紀貫之」

紀貫之の時代、歌は声に出して歌うものでした。  
歌の内容だけでなく、声も大事な要素であり、声  
の美しい人はそれだけで尊敬の対象となりま  
した。「楽器初音ミク」に音を入れて、あるいは  
人気声優の小野大輔さんの声によって貫之の作  
品を再現し、楽しんでいただきます。

### IV 文学のかおり

香りを用いた作品によって、文学のなかの  
香りについて、考えてみようというコーナー  
です。



▲安藤英由樹+渡邊淳司+田畠哲穂+Maria Adriana Verdaasdonk  
「Saccade-based Display: "meta-literature"」2011(作家蔵)  
今回の展覧会では、高知バージョンの新作が発表されます！

平安期から現在に至るまで、文学作品において花の香は懐かしい記憶を呼び起こす装置としてしばしば用いられています。この作品の前に立つたら、葉っぱの形をした紙に香水を吹きかけ、「つぼみ」に近づけてみてください。匂いに応じた花がふわりと開きます。皆さんの中にある懐かしい思い出もまた、花開くことでしょう。

その他、参加型の展示として、文学館コラージュ等を予定しています。常設展も含め、2階全体が会場となるこの企画展。皆さんもぜひ文学館に来て、「文学」と「メディアアート」の楽しさを体験してみませんか。

(学芸課／永橋禎子)

## ◆関連企画のご案内◆

### ■作家たちによるギャラリートーク より深く、作品を知ることの出来るチャンスです。

日 時：平成25年2月9日(土) 午後1時30分～2時30分

場 所：高知県立文学館2階企画展示室 参 加：要当日観覧券

申 込：不要(当日、直接会場にお越しください。)

### ■文章の読み跡 「触れて読む文章」 \*中学生以上が対象のイベントです。

iPad(アイパッド)を使った体験画面音読と、文字としてのテキストの中間に位置するプロジェクト展示(映像による展示)をご体感下さい。

日 時：平成25年3月9日(土)、10日(日) ①午前10時～12時、②午後2時～4時

講 師：丸谷和史+渡邊淳司+安藤英由樹+植月美希

場 所：高知県立文学館1階ホール 定 員：各回とも12名

参加費：要当日観覧券 申 込：電話または文学館受付にて事前申込

### ■工作イベント「生成される物語～文字が舞うスノードームを作ろう！」

文字が舞うスノードームを作成します。偶然生み出されるコトバを楽しもう！

日 時：平成25年2月24日(日) 午後2時～4時30分

集 合：高知県立文学館1階ホール 参加費：当日観覧券と材料費300円が必要

\*お好きな空きピンや中に入れる飾りをお持ちください。(持ち込みの場合、材料費は100円となります)

申 込：電話または文学館受付にて事前申し込み。(定員50名)

### ■工作イベント「貫之と月見を、寅彦と珈琲を～しおりを作ろう！」

紀貫之の和歌、寺田寅彦の俳句を、墨流しと点字で表現したしおりを作ります。

日 時：平成25年3月31日(日) 午後2時～4時30分

集 合：高知県立文学館1階ホール 参加費：要当日観覧券

申 込：電話または文学館受付にて事前申し込み。(定員50名)

### ■朗読の会「文学 Media Art(仮)」

文学館朗読カルチャーサポーターによる朗誦。  
今回は、五感をフルに使ってお楽しみいただけます。

日 時：平成25年3月16日(土) 午後2時～4時

参加費：無料

場 所：高知県立文学館1階ホール

申 込：当日、直接会場にお越しください。

※その他、メディア芸術祭優秀作品上映会(2月10日(日)、11日(月・祝)、17日(日))を予定しています。  
詳細は展覧会チラシをご覧ください。



平成25年  
2月9日(土)



4月7日(日)  
企画展示室

観覧料500円

### ☆展示解説

展覧会担当者による  
展示解説を行います。

### 毎週土曜日

※2月9日を除く  
各日とも午後1時半～  
(約30分)

参加には当日観覧券  
が必要です。  
直接会場にお越しく  
ださい。

好評  
開催中!

大正ロマンの画家

# 高畠華宵の世界

文学館では、現在、「大正ロマンの画家 高畠

華宵の世界」を開催中です。

12月には、関連イベント「大正イマジーリー  
学会研究会」や朗読の会「花たちのしらべに  
寄せて」「ワークショップ「乙女の手紙教室」  
が開催されました。1月13日(日)には、高畠  
華宵大正ロマン館主任学芸員の高畠麻子氏  
を講師に招いて記念講演会「華宵からの手  
紙を読む」を開催予定です。



▲貴重な原画が並ぶ展覧会の様子

深そうに見て下さっています。大正・昭和の雑誌だけではなく、戦後の子ども向け絵本における華宵の活躍も印象強いものであつたようです。若い方にとっては新鮮な魅力があるようで、幅広い年代の方々に楽しんでいただいている

明治35年、14歳の華宵は日本画を学ぶため、上阪し、京都市立美術工芸学校（現・京都市立芸術大学）へ入学し、めきめきと実力をのばしました。華宵は大正2年から講談社の雑誌に表紙絵や口絵、挿絵を描き始めます。「少年俱楽部」では、長年表紙絵を担当していましたが、大正12年に画料問題がこじれ、実業之日本社の「日本少年」へと活躍の場を移しました。いわゆる「華宵事件」です。

華宵がいなくなつた直後の「少年俱楽部」は、販売部数がガタ落ちとなりますが、読み物を重視へと編集方針を変え、昭和37年にその幕を閉じるまで、活字の力で読者を魅了し続けました。

華宵は大正2年から講談社の雑誌に表紙絵や口絵、挿絵を描き始めます。「少年俱楽部」では、長年表紙絵を担当していましたが、大正12年に画料問題がこじれ、実業之日本社の「日本少年」へと活躍の場を移しました。いわゆる「華宵事件」です。

華宵がいなくなつた直後の「少年俱楽部」

は、販売部数がガタ落ちとなりますが、読み物を重視へと編集方針を変え、昭和37年にその幕を閉じるまで、活字の力で読者を魅了し続けました。

時代に、雑誌の編集方針に大きな影響を与えました。

華宵は津村順天堂（現・株式会社ソムラ）の婦人薬「中将湯」の広告絵で、デビューデ、講談社や実業之日本社を中心とした雑誌の表紙絵や挿絵、口絵を描き、挿絵画家として華々しく活躍しました。関東大震災後は、鎌倉の稻村ヶ崎一の谷に「華宵御殿」と呼ばれる豪邸を建て、絵だけに専念する日々を送ります。

昭和8年頃から、華宵は再び本格的な日本画制作に取り組みます。昭和10年に描かれた六曲一双屏風「移りゆく姿」は華宵の代表作となりました。

71歳で養子の華晃とともに渡米しますが、アメリカでの生活は思いの外厳しく、2年足らずで帰国。亀太郎の勧めもあり、兵庫県の明石愛老園に入所します。その後、少年時代に華宵のファンであった弁護士・鹿野琢見氏と出会い、その交流から華宵のファンクラブが発足します。

昭和41年7月に、華宵はその生涯を閉じます。挿絵画家としてはじめて叙勲、勳五等双光旭日章を受章しました。

企画展では、「中将湯」の広告絵原画10点、日本画5点、挿絵75点、雑誌の表紙絵や口絵など21点をご紹介しています。また、高知県出身で後に高知県展創立メンバーとなる山六郎や、山とともに大阪の出版社・プラトン社で仕事をし後に資生堂で活躍した山名丈夫の装丁本やデザインもご紹介しています。

「大正ロマンの画家 高畠華宵の世界」は1月27日(日)まで開催しています。この機会にぜひ高畠華宵の世界に触れ、百年前の少年少女文学の香りをお楽しみ下さい。「」来館をお待ちしています。

(学芸課／北添尚子)



# 山・水・人のよろしさ——池川町の山頭火句碑——猪野 瞳

山頭火が松山を発ち、小豆島の尾崎放哉の墓参をして鳴門から高知の甲浦へ入ったのは昭和14年11月4日だった。それから室戸、田野、安田、赤岡を歩き、11日に高知市へ入った。16日まで高知市で行乞、あと伊野、越知、池川をへて引地橋から愛媛県へ入ったのは11月30日だった。

16日までの行乞で4銭、米4合、47銭米8合、あるいは33銭米5合といったら日々の功德の旅つづきだった。

松山へ帰り、脳溢血で世を去ったのは翌15年10月11日、59歳だった。山頭火が当時知られたいたのは「層雲」の仲間の間でだったが、没後30すぎ、山頭火ブームがくる。脚光をあび、全国に山頭火句碑とともに「全集」もで山頭火本も多くてた。

松山へ帰り、脳溢血で世を去ったのは翌15年10月11日、59歳だった。山頭火が当時知られていたのは「層雲」の仲間の間でだったが、没後30すぎ、山頭火ブームがくる。脚光をあび、全国に山頭火句碑とともに「全集」もで山頭火本も多くてた。

池川町にある山頭火句碑

木と木と  
うたかく寝る  
あれに

山頭火

山頭火

11月下旬の池川は澄んだ空気と清流の別天地の感があり、青石の山頭火句碑は川に面した石垣沿いに建てられていた。

わが手わが足われにあたたかく寝る

野宿の八句のなかのこの一句が彫りこまれており、その下に「山のよろしさ、水のよろしさ、人のよろしさ。主人に教へられて、2里ちかく奥にある池川町へでかけて行乞」「いろいろの点で、よい町であった」という日記も彫りこまれていた。これが山頭火のみた池川町だった。このあと野宿、仁淀渓谷をへて愛媛県へ抜けた。

碑を見ていると山頭火がここへきたのは73年前であつたのか。池川町は今もその「よろしさ」を持つたままではないかと思えた。

(詩人)

——最近の寄贈資料から——  
高濱虚子揮毫軸 「龍卷」  
(松本薰宛書簡)  
松本薰氏寄贈

新日本出版社

中脇初枝著

「祈祷師の娘」

中脇

寅治苑

川島敦夫著

「採玉集写本」

竹内功

ハウス31

インド大帝国の冒険

メリーポー

オズボーン原作

食野雅子訳

メディアワークス

「ふみ刊」他

小松弘愛選

ふたば工房刊

山本靖子著

「戦地

から土佐への手紙」

高知ミニマザ

の会編刊

吉田広夫著

続わたしはある

吉田広夫編

吉田

ふみ刊

川奈静著

「川奈静詩集

「いのちの重

み」川奈静著

コールサック刊

高橋賀代著

侏儒

の言葉

精選名著複刻全集

芥川龍之介著

名著

複刻全集編集委員会編

日本近代文学館刊

他

多田智昭著

「劇団笛の会創立五十周年記念

第92回公演

「淀川」

台本

宮尾登美子原作

多田智昭

脚色

岩城昭子著

草萌

岩城鹿水著

岩城

昭子刊

松田信弘著

(CD-R)

田中英光参考

文献目録

松田信弘著

井上博子著

大津皇子怨

念の歌

柿本人麻呂を探して

井上智幸著

文芸

社刊



▲高濱虚子揮毫軸と「龍卷」第19巻1号

## 資料受贈報告

受贈報告(平成24年7月～11月) 敬称略

▼有川浩「自筆色紙「地方には光がある!」」

新日本出版社

中脇初枝著

「祈祷師の娘」

青々として空

の如く」

▼南ルリコ「大町芳衛(桂月)書簡

石川

寅治苑

川島敦夫著

「採玉集写本」

▼竹内功

ハウス31

インド大帝国の冒険

メリーポー

オズボーン原作

食野雅子訳

メディアワークス

「ふみ刊」他

小松弘愛著

「高知詩集

2011年

吉田広夫著

続わたしはある

吉田広夫編

吉田

ふみ刊

川奈静著

「川奈静詩集

「いのちの重

み」川奈静著

コールサック刊

高橋賀代著

侏儒

の言葉

精選名著複刻全集

芥川龍之介著

名著

複刻全集編集委員会編

日本近代文学館刊

他

多田智昭著

「劇団笛の会創立五十周年記念

第92回公演

「淀川」

台本

宮尾登美子原作

多田智昭

脚色

岩城昭子著

草萌

岩城鹿水著

岩城

昭子刊

松田信弘著

(CD-R)

田中英光参考

文献目録

松田信弘著

井上博子著

大津皇子怨

念の歌

柿本人麻呂を探して

井上智幸著

文芸

社刊

書簡

書簡の書かれた年代は不明ですが、ここに

和6年4月。紀貫之邸趾や室戸岬に出向きました。

室戸岬には虚子の句碑が建立されており、「龍巻に添うて虹立つ室戸岬」の句が刻まれています。

この句は虚子がこの時の室戸岬での吟行で龍巻に遭遇したときに詠んだもので、虚子は「私を室戸岬が歓待している」と喜んだそうです。

虚子の来高が契機となり「龍巻会」が発足、翌年10月に俳誌「龍巻」が発刊されました。誌名は虚子のこの龍巻の句にちなんでつけられたものです。

写真の資料は、1960(昭和35)年5月から「龍

巻」の主宰者となつた故 松本薰氏の旧蔵品で、虚子

に題字の揮毫を依頼し、その返信として届いた書簡

(学芸課／岡本美和)



このほか、全国の個人・関係機関の方々から図録など数多くの資料をご寄贈いただきました。厚くお礼を申し上げます。

# 「大原富枝生誕100年

「書くことは生きること」展を終えて

高知県立文学館は、平成24年9月26日(水)、「大原富枝生誕100年『書くことは生きること』展」を開催しました。場所は、大原富枝の生誕地、高知県本山町にある領北中高等学校の体育館です。当日は、地域の人々や学生たち約170名が参加しました。

はじめに展覧会の担当が、結核の自宅療養中に、文学に親しみ、青春時代、大原さんが自然や故郷や友人や恋などを詠んだ短歌や詩の魅力について紹介しました。

続いて作品の中から、「巣立ち」と「婉という女」を文学館カルチャーサポーターの西森純子さんが朗読。会場からは、大きな拍手が贈られ、学生からは「大原富枝という人と彼女の文学に興味が湧いた。病気がちであった分、痛みのわかる人だったと思う」といった声が聞かれました。

また、10月7日には、日本近代文学館名誉館長の中村稔氏による「大原富枝の歴史小説と多くの皆さんとともに、生誕100年を迎えた大原さんを顕彰する催しを開催することができました。本当にありがとうございました。

最後に、本山町と共に開催した今回の展覧会を終えて、本山町立大原富枝文学館より「入館者が倍増しています」との声をいただき、嬉しい限りです。

(学芸課長／津田加須子)

▲中村稔氏の講演



▲県審査に出場された皆さん

そして、地区審査を勝ち抜いた17校22名の児童生徒の皆さんが、11月11日(日)に高知県立文学館で開催さ

れた県審査に出場しました。金賞1名、審査員特別賞1名、郷土文学賞1名、銀賞2名、銅賞5名が選ばれ、金賞に輝いた宮川実生さん(高知大学教育学部附属中学校3年)は、2年連続の金賞受賞となりました。

その他、県審査への連続出場者5名が選ばれ、金賞に輝いた宮川実生さん(高知大学教育学部附属中学校3年)は、2年連続の金賞受賞となりました。その他の県審査への連続出場者5名が選ばれ、金賞に輝いた宮川実生さん(高知大学教育学部附属中学校3年)は、2年連続の金賞受賞となりました。



## 朗読コンクールは今年で15回目を迎えました！

イ  
ベ  
ン  
ト  
紹  
介

嶋岡農さん  
富田碎花賞受賞

トピックス



（学芸課長／津田加須子）  
「私の作品は私の人生のお汁で描いている。一つのことでも成功してもそれを続けようとはせず、また別のことに対する挑戦が大切」と話をされ、会場の皆さん興味深く聴き入っていました。

毎年レベルアップする朗読コンクール。来年も皆さんのご参加をお待ちしています。

(学芸課／北添尚子)

本県四万十町出身の嶋岡農さんが『終点オクシモロン』(洪水企画刊)で第23回(平成24年度)富田碎花賞を受賞されました。嶋岡さんは、町田市市民文学館立ち上げに関わられ、現在同文学館顧問をされています。

昭和29年刊行の詩集『薔薇色の逆説』以来、27冊の詩集を刊行。昭和40年詩集『永久運動』で岡本弥太賞、平成11年詩集『乾杯』で第32回小熊秀雄賞受賞に続く栄誉です。

受賞作『終点オクシモロン』は、非人間的な現代文明への批判が痛烈に展開されつつも、作品からは終点が始まるとなり得る一すじの希望を見出します。是非、ご一読ください。

受賞作『終点オクシモロン』は、非人間的な現代文明への批判が痛烈に展開されつつも、作品からは終点が始まるとなり得る一すじの希望を見出します。是非、ご一読ください。

(学芸課長／津田加須子)

## 館長室から

月日は百代の過客にして…

元吉 喜志男

様々な出来事や想い出を残して辰年が終わり、新しい  
巳年の暦が年のはじまりを告げます。

学生時代に過ごしたキャンバスの落葉樹。秋の紅葉をすつかり落とした冬の風景を観るにつけ、木々も風もあの頃のまま変わらない。ふと、「年々歳々花相似たり、歳々人々同じからず」の言葉が浮かんできます。「人生」はよく「旅」にたとえられたりもします。月日は百代の過客にして、行きかう年もまた旅人なり」の書き出しではじまる『おくのほそ道』。去年の秋に旅から帰り、どうにか落ちついて年の瀬を迎えた芭蕉先生。しかし、新春を迎える空に霞が立ちこめる頃になると、心はもう白河の闇を越えてみちのくの旅に…。

この有名な冒頭の下敷きは、李白の「春夜、桃李園に宴するの序」にある「夫れ、天地は万物の逆旅にして、光陰は百代の過客なり。而して浮生は夢の若し」とあると言われています。

もつとも、時間の過ごし方への姿勢となると、「歎を為すこと幾ばくぞ 古人燭をとりて夜遊ぶ まことにゆえあるなり」と今を精いっぱい楽しもうという李白。片雲の風に誘われて漂白の思ひやまず」と旅の実践に思いを馳せる芭蕉。と各自で異なります。

青春・朱夏・白秋・玄冬。人生も季節により、旅の味わい方も変わってきます。新年はこの一年どんな旅をしようかを考えるよい機会です。

高知県立文学館は、昨年で15周年を迎えました。土佐日記から現在の作家までを展示の中にも反映させながら、訪れていただくお客さまに、昨年より一年歳を重ねたことに倣する素敵な時間を提供出来るよう努めていますね」と思いを巡らす昨日です。

**特別ゲストとして  
児童文学作家・あまんきみこさんが  
朗読フェスティバルに来てくれます！**



児童文学作家。1968年、『車のいろは 空のいろ』を出版し、第1回日本児童文学者協会新人賞、第6回野間児童文芸推奨作品賞を受賞する。

『ちいちゃんのかげおくり』『おにたのぼうし』『きつねのおきやくさま』など小学校の教科書へ掲載される作品が多く、上品なユーモア、深みとロマンチズムのあるどこまでも優しい世界観が特徴的。

# 朗読フェスティバル 2013

朗読フェスティバル 2013

朗読する」とー

それは  
目で、耳で、声で、

文學を楽しむ  
といつ」と。



場所：文学館1階ホール

時間：午後1時～午後4時30分（予定）

※あまんさんのトーク（タイトル：「ようこそ、  
“物語”の世界へ」）は午後3時30分頃  
の開始を予定しています！

2013年

2月16日(土)  
開催！  
入場無料

# 企画展 案内

大正ロマンの画家

## 高畠華宵の世界

平成24年11月24日(土)～平成25年1月27日(日) 場所:企画展示室 観覧料:400円(常設展含)  
 ◆休館日 12月27日(木)～1月1日(火)

大正から昭和初期にかけて一世を風靡した挿絵画家・高畠華宵の作品を紹介する展覧会。「華宵好み」とよばれる独特の美人画は今多くのファンを魅了し続けています。大正10年の今年、高畠華宵の華麗なる世界をお届けします。

展覧会の紹介をしています! 詳細は4ページをご覧ください。



「青葉かげ」©弥生美術館

## 文学 Media Art 展 紀貫之からライトノベルまで

平成25年2月9日(土)～4月7日(日) 会期中無休

場所:企画展示室 観覧料:500円(常設展含)

文学とメディアアートという異なる分野の芸術のコラボレーションによって、より深く芸術世界を楽しもうという試みです。手ざわりや映像、音など、感覚を駆使した文学の新たな楽しみ方を体感してみませんか。

※この展示は、平成24年度(第16回)文化庁メディア芸術祭協賛事業です。

※この展示は、平成19年12月15日～平成20年2月17日にかけて東京都写真美術館にて開催された企画展「文学の触覚」を下敷きとして再構成したオリジナル企画です。

展覧会の紹介をしています! 詳細は表紙・2・3ページをご覧ください。



## 朗読フェスティバル 2013

児童文学作家・あまんきみこさんが朗読フェスティバルに来てくれます!!

朗読を通して文学に親しんでいただく参加型のイベント、「朗読フェスティバル」を今年も元気に開催します! 多彩な作品の数々を聴きに、ぜひお越しください。

イベントの紹介をしています! 詳細は7ページをご覧ください。



## 高知県立文学館マスコットキャラクター決定＆名称募集!!

投票の結果、こちらのキャラクター＆ヤイロチョウが当館のマスコットキャラクターに選ばれました!! 現在、名称を募集中です。文学館入り口、もしくはホームページにてご案内していますキャラクターデータを参照し、ぴったりの名前をつけてあげてください!

名称の応募は郵送または文学館入り口に設置しているコーナーにて受け付けています。

※投票された名称の中から、当館職員が決定します。名称が採用された方には、粗品をプレゼント!



期間: 2012年10月1日～2013年3月15日

投票場所: 高知県立文学館内(郵送でも可) 名称発表: 2013年4月1日(予定)

### 利用案内

開館時間 午前9時～午後5時 (入館は、午後4時半まで)

休館日 年末年始(12月27日～1月1日)を除き、無休。

※その他メンテナンス等で臨時休館することもあります。

観覧料 一般350円 企画展はそれぞれ異なります。

20人以上の団体は2割引。高校生以下無料、

高知県・高知市長寿手帳、身体障害者手帳、療育手帳、精神障害者保健福祉手帳、戦傷病者手帳および被爆者健康手帳をお持ちの方とその介護者1名は無料です。

駐車場 なし。ただし近辺に有料駐車場があります。

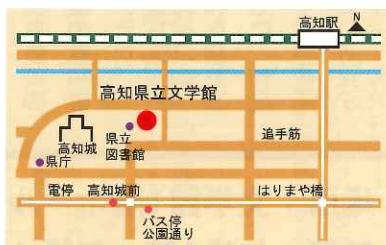
附帯設備 ホール、ミュージアムショップ、子どものぶんがく室、茶室「慶雲庵」

貸出施設 企画展示室、ホール、茶室

E-mail: bungaku@kochi-bunkazaidan.or.jp

<http://www.kochi-bunkazaidan.or.jp/~bungaku/>

### 交通のご案内



- 高知龍馬空港より空港連絡バス(県庁前行) 「公園通り」下車 北へ徒歩5分
- JR高知駅下車徒歩20分(またはバス・路面電車を利用)
- 土佐電鉄電停高知城前下車北へ徒歩5分
- バス停公園通り下車北へ徒歩5分

高知県立  
文学館

T 780-0850  
高知市丸ノ内1丁目1-20  
電話 088-822-0231  
FAX 088-871-7857